

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 湯 明 显

論 文 題 目

原因・理由文における日中対照の定量的分析
—カラ・ノデを中心に—

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 佐久間淳一

委員 名古屋大学教授 釘貫 亨

委員 名古屋大学教授 大室 剛志

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文で論者は、日本語の「カラ」「ノデ」で前件と後件が結び付けられる原因・理由文について、それが中国語に翻訳されたとき、どのような表現が対応するかを検討し、特に、接続辞が用いられる場合について、定量的な分析を試みた。

まず、冒頭第一章に続く第二章では、日本語の原因・理由文に関する先行研究と、中国語の原因・理由文に関する先行研究をまとめている。「カラ」と「ノデ」は、用法に違いもあるが、共に大きく二種類の用法があり、「事態の原因」及び「行為の理由」を表す用法と「判断の根拠」及び「発言・態度の根拠」を表す用法があるとされてきた。論者は、前者の用法を「カラⅠ」「ノデⅠ」、後者の用法を「カラⅡ」「ノデⅡ」と呼んでいる。一方、中国語には、因果関係を表す複文に、説明性因果複文と推論性因果複文があり、前件と後件は、特定の接続辞を用いて接続されることもあるが、接続辞を用いず、単に、前件を表す節と後件を表す節が単に並置されるだけの場合も少なくない。

第三章から第六章では、以上の先行研究を踏まえ、「カラⅠ」「カラⅡ」「ノデⅠ」「ノデⅡ」のそれぞれについて、日中対訳テキストの用例数に基づき、中国語の対応表現の分析を行った。その際、論者は、対応表現の出現頻度の多寡をより客観的に示すため、用例数から偏差値を算出している。分析の結果、「カラⅠ」については、「事態の原因」を表す場合、「因為」、次いで「因為所以」が多いこと、「行為の理由」を表す場合、「就」、次いで「所以」が多いことがわかった。同様に、「カラⅡ」では、「判断の根拠」を表す場合、「因為」、次いで「所以」が、「発言・態度の根拠」を表す場合、「所以」、次いで「就」が多い。また、「ノデⅠ」では、「事態の原因」を表す場合、「由于」、次いで「所以」「因為所以」が、「行為の理由」を表す場合、「就」、次いで「所以」が多い。一方、「ノデⅡ」では、「判断の根拠」を表す場合、「所以」、次いで「由于」が多いが、「発言・態度の根拠」を表す場合、顕著に出現頻度の高い対応表現はないことがわかった。

終章である第七章では、第六章までの分析結果を踏まえて、日本語の「カラ」「ノデ」と、それに対応し得る中国語の様々な接続辞の間関係について、包括的に考察している。「カラ」「ノデ」に対応する中国語の接続辞の中でも、「因為」「所以」「就」が最も頻度が高いが、「因為」は主に「カラ」に対応するといった偏りがあり、このことは「カラ」と「ノデ」の用法の違いがあることを裏付けている。また、「所以」は、「カラ」「ノデ」の4つの用法すべてにおいて頻度が高いが、「因為」は「事態の原因」「判断の根拠」を表す用法に、「就」は「行為の理由」「発言・態度の根拠」を表す用法に使用が偏っていて、このことは、「カラ」「ノデ」の用法を、それぞれ「カラⅠ」「カラⅡ」、「ノデⅠ」「ノデⅡ」に大別する先行研究の分類に、疑問を投げかける結果と言える。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

日本語の「カラ」「ノデ」については多くの先行研究があるが、その違いを非母語話者に簡潔に説明することは難しい。「カラ」「ノデ」を含む原因・理由文を中国語に翻訳した場合に、一対一で対応するような表現はなく、様々な表現が対応し得ることも「カラ」「ノデ」の理解を難しくしている。しかし、「カラ」「ノデ」と中国語の対応表現の関係について、実証的に明らかにしようとした研究は少なく、「カラ」「ノデ」と中国語の接続辞の対応関係を具体的に示すことができたことは、本論文の大きな成果として、高く評価することができる。

そもそも、「カラ」「ノデ」を含む原因・理由文を中国語に翻訳した場合、特定の接続辞が用いられることなく、前件と後件を表す節が単に並置されるに過ぎない場合も少なくない。このことは、「カラ」「ノデ」に対応する中国語の表現は「因為所以」であるとする従来の理解が一面的であることを示して、本研究の実証的な研究を通してそのことが明らかになったことは意義があると言える。また、「カラ」「ノデ」に対応し得る接続辞も多様であり、特に、客観的因果関係を表す代表的な接続辞とされてきた「因為」について、主観的因果関係も表すことができ、客観的因果関係を表すのによりふさわしい接続辞は「由于」であることを明らかにしたことは、これまで指摘されてこなかったことであり価値が高い。

また、本研究のような二言語の対応関係に関する研究では、その対応関係が「より多い」「より少ない」といった大まかな印象で論じられることが少なくないが、定量的な分析を通して、日中両言語の対応関係をより客観的に示そうと努めたことも評価できる。

その一方で、「カラ」「ノデ」そのものについては、先行研究に対する論者の立場が明確でなく、本研究における分析から得られた知見の中には、「カラ」「ノデ」についてさらに理解を深める端緒となるようなものも含まれていたにもかかわらず、十分な考察ができていない点は惜まれる。他方、「カラ」と「ノデ」には違いがあることが先行研究で既に指摘されているにもかかわらず、論文の構成上、あたかも「カラ」と「ノデ」が並行的な表現であるかのように扱われていることは、適切とは言えない。また、「因為」「所以」と「就」が「カラ」「ノデ」を含む原因・理由文に対応する表現という点で同列に扱われているが、そもそも、中国語において前件と後件の因果関係は接続辞がなくても表すことができるので、問題の接続辞が原因・理由を表しているとは限らない。特に「就」について、その点の分析が不十分に終わってしまったことは問題と言える。しかし、このような問題点は、本論文の高い学術的価値を損なうものではないと考えて差支えない。

以上により、審査委員一同、一致して、本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと判断した。